

「地方のジェンダーギャップ」に関する 意見交換会



【登壇者】

野田 聖子 衆議院議員(自由民主党 情報通信戦略調査会長)
田代 達生(カンダまちおこし 代表取締役)
藤木 由江・萩原 綾子・高木 安希子(十六総合研究所 研究員)

❖ 地方には見えない「圧」がある

● **田代** 本日は、野田先生をお迎えし、地方のジェンダーギャップをテーマに2回目の意見交換会を行います。

十六総合研究所が提言書『「女子」に選ばれる地方』を発刊したちょうど同じ時期(昨年春)に、共同通信社と上智大学が都道府県版ジェンダーギャップ指数を公表するなど、地方を切り口にしたジェンダーギャップの議論が深まりつつあると感じます。

◆ **野田氏** 私は女性政策をライフワークとしていますが、地方には目に見えない「圧」があるように感じます。

● **船坂香菜子氏** 私の住む飛騨市では、女性が男性を支えるのが当然だという考え方が根付いています。夫の実家が家具店なので、私は妻として当然に家業を手伝っていると思われるようです。出張から帰ると「これからご飯を作るの大変ね」とまわりから言われます。そういった日常的なちょっとしたことが圧になっているかもしれません。

● **平野氏** 私は岐阜市出身で、いいお嫁さんになる

野田聖子衆議院議員をお迎えし、第2回「ジェンダーギャップ」に関する意見交換会を開催しました。今回は、十六総合研究所が昨年4月に発刊した提言書『「女子」に選ばれる地方』でご紹介した企業経営者のみなさまにもオンラインにてご登壇いただきました。

【オンライン登壇者(企業名50音順)】

いとしろ
石徹白洋品店 株式会社
(郡上市・石徹白に受け継がれる服の製造・販売)
平野 馨生里氏

株式会社 M&Company
(飛騨市・インバウンド向けツーリズム、古民家移築事業)
全国通訳案内士 白石 実果氏

株式会社 ヒダカラ(飛騨市・地域商社)
代表取締役 船坂 康祐氏 代表取締役 船坂 香菜子氏

株式会社 リーピー
(岐阜市・Web制作、Webサービス、人材紹介)
代表取締役 川口 聡氏

有限会社 渡辺酒造店(飛騨市・清酒製造、販売)
代表取締役 渡邊 久憲氏

ようにと育てられました。東京の企業ではそういう雰囲気は全くなかったのですが、Uターンをして岐阜市で働いていた時は、女性に対する保守的な風潮を感じました。その後、郡上市に引っ越すと、人手不足もあってか女性に対する偏見はなく、むしろ個人事業主として活躍されている女性も多いです。

● **田代** 地域によっても濃淡はさまざまです。兵庫県豊岡市ではジェンダーギャップ解消を、まちの存亡をかけた今世紀最大の課題として掲げています。大きな危機感が良い変化につながります。

◆ **野田氏** 正規社員には就けず、非正規では先が見えないと一念発起して起業した女性が成功した事例もあります。ここで大切なのは女性起業家への融資です。女性の方が勤勉だからと、女性に融資して成長した銀行も海外にありますので、日本でも応援する体制が必要です。

● **白石氏** 米国のお客さまから聞いた話ですが、カリフォルニア州ではボードメンバー(取締役会の役員)の女性比率を50%以上にすることが法律で定められているそうです。意識を変えるのは難しいですが、仕組みから変えることで、結果として意識が芽生



石徹白洋品店(株)
平野 馨生里 氏

(株)M&Company
白石 実果 氏

(株)ヒダカラ
船坂 康祐 氏

(株)ヒダカラ
船坂 香菜子 氏

(株)リーピー
川口 聡 氏

(有)渡辺酒造店
渡邊 久憲 氏

えるようです。女性への融資なども、仕組みから整えるといい結果につながるかもしれません。

◆野田氏 大賛成です。ドイツも監査役に一定の割合の女性を入れなければならないと法律で定めています。日本では民間よりも政治が先だという雰囲気がありますが、女性の活躍が進む企業ほど経営指標が良いというデータもあるので、女性の役員や監査役の比率を義務化するなどして、民間でどんどん登用できると良いと思います。

◆ ジェンダー問題は「知る」ことから

●藤木 日本でも、地方のジェンダー問題に国家レベルで関心が向かい始めています。国土交通省では、地域から女性が流出し続け男女比に偏りが出ると、地域の存立が危ぶまれるという危機感から、国土審議会・計画部会の中で議論がされています。

◆野田氏 経済産業省も、テクノロジーで生理、妊娠などの女性特有の健康課題を解決・サポートするフェムテック産業を育成しようとしています。男性は、女性の課題についてよくわからないという理由で、こういった話題を避けようとしているくらいがあります。体感はできなくても、学べば知ることはできます。

●白石氏 ジェンダーについて語る時に人権の問題としてとらえることが重要だと思います。自治体では地域存続、人口減少に結び付けがちですが、人権の話がないと崩れやすいと思うので、今後フォーカスすべきだと思います。

◆野田氏 男女がお互いを理解し合える社会の実現に向けて、今後、学校教育の中で子どもたちに人権としての性教育を実施していきたいと考えています。

◆ がんばらなくていい世の中に

●高木 前回の意見交換会の中で、野田先生の「がんばらなくていい」「ロールモデルはいらない」と

いうご発言がとても心に残っています。

◆野田氏 国会議員には強い志と信念がなければならぬ、というイメージがあります。男性も女性も先達を超えなければと考え、無駄な力を使っている気がします。私は周りの方々の意見をたくさん聞きながら育てていただいたので、長くマイペースで続けてこられたのかなと思います。私たちは働くためだけではなく、楽しく生きるために生まれてきたはずなので、それを邪魔するのが働き方であれば、それを排除しなければなりません。私は、国会議員としての後半は、どうしたら楽に仕事ができるか、つらい気持ちを楽しむに変えられるかについてずっと考えています。自分が楽だったら他の女性議員も楽なんじゃないかと。

私には子どもがいるのですが、子どもは制御不能なので大変です。国会で全く意見の合わない大人と議論を交わすのもつらいですが、目の前にいる子どもが突然転んだり、熱を出したり、いきなり吐いたりする方が心身消耗します。仕事と子育てをデュアルで進める中で、「両立」というと両方背負わなければならないようで重いので、「モード」として切り替えたらいいのかなと思います。私も、子育てモードの時は国会で言われた嫌みは頭になく、仕事モードの時は理不尽な息子に振り回されることはありません。



うまく切り替えるには、働く時間を短くして頭と身体を休めることが大切で、長時間働かないようにするためITを活用しています。こども政策担当大臣の時には、国会での質疑応答のための通例の早朝会議をなくし、前日にLINEでやり取りするように変え、子どもとの時間を確保しました。トップが妙なことをすれば、みんなが妙なことができ、そのうちそれが当たり前になっていきます。今は人口減少、女性の貧困、人手不足など難が多い時代ですが、つらい時こそ妙なことに挑戦し、世の中を変えるチャンスです。例えばコロナ禍では苦しいことや悪いことが先行しましたが、ネットでの会議やテレワークが正当化されました。

◆ ジェンダーギャップ解消の初手とは

● **田代** 最後に、地方のジェンダーギャップ解消に向けて、今後何から手をつけたらいいのかについて議論したいです。

● **萩原** 日本の男性は家庭の中の家事、育児、介護などのケア労働を専業主婦に担わせてきた歴史があります。女性は外で働くようになりましたが、家の中では引き続きケアを担うため、女性の負荷が大きくなっています。女性の社会進出と同時に、男性の家庭進出も両輪で進める必要があると思います。そのために、企業も男性が育児休暇を取りやすい雰囲気醸成するなど、男性の家庭進出を後押ししていくことが初手ではないかと思います。

● **川口氏** わが家では私が頻繁に料理や保育園

の送り迎えをしています。男性の家庭進出については年代的なものもあると思います。私は今39歳ですが、周りの同世代の男性や当社の男性社員は育児や家事に理解のある人が多く、中には8か月育休を取っている社員もいます。ただし、そのためには、企業の生産性をつきつめていかないと、働きやすさも賃金アップも実現できません。地方の経営者ももっと危機意識をもって取り組んでいかないと変わっていかないと考えています。

● **渡邊氏** 当社では、ジェンダーフリーの老舗酒蔵による地域貢献とは何か、というテーマについて取り組んでいます。壮大な課題なのでじっくりと、長期にわたって取り組んでいきます。

● **船坂康祐氏** 近々、当社で初めての育休取得者が出る予定ですが、それは男性社員です。ここ飛騨で男性が育休を取れることを会社として発信していくことは、大切だと改めて思っています。夫婦の間でも初動が大切で、最初の子どもの生まれた時の役割分担が重要です。いい事例になるといいなと思っています。

◆ **野田氏** 育休は休業ではないという考えを浸透させることが必要です。休むことは昭和の男性社会ではタブーであり、休業という言葉はネガティブなイメージがあるので表現を変える必要があると思います。また、出勤は負担になります。コロナ禍で進んだテレワークが、最近はまだ出勤体制に戻りつつありますので、テレワークを正規の勤務体系として認め、使い倒す社会にする必要があります。休むか働くかでなく、どちらもハイブリッドにやればジェンダー平等にも結び付くと思います。今は液体ミルクがあるので、男性も赤ちゃんの世話を以前に比べて容易にできます。男女ともに子どもの世話ができるような環境を作り、休むことが生業と同じようなプレシヤスな行動であることが浸透すれば、男性も堂々と育休を取れると思います。

● **田代** そもそも私たちが目指すのは、こうしたジェンダーギャップについて、わざわざ語らなくてもいい社会だと思っています。本日はありがとうございました。

(意見交換実施日:2022年12月12日)

